長野市の埋蔵文化財第27集

小柴見城跡

1988.3

長野市教育委員会
長野市水道局

序

悠久の歴史の流れの中で各地域に繰り広げられた先人たちの生活を少しでも多く認識するということは、単にわれわれの懐古の情を満たすにとどまらず、過去の人々の自然との関わりの深さや、人と人のつながりを知ることによって未来への文化を求めてゆくための一つの道程ともなりましょう。

今回調査の結果を報告する小柴見城跡は、中世信濃史における重要な城館の一つとして古くから研究者の注目を集めたものでありました。今回の調査は空堀部分のみという限定されたものではありましたが二重堀という特異な形状も確認され、今後の研究にとって新たな一面を提供するものとなりましょう。

時代の要求により開発を進めるための最低限度の調査に止めました結果を、ここに長野市の埋蔵文化財第27集として報告いたしますが、この報告が今後長野盆地の中世史究明のための基礎資料として広く活用されることを期待してやみません。

末筆ながら直接・間接に調査に参加されたみなさまの御協力に記して深謝いたします。

昭和63年３月

長野市教育委員会教育長　奥村秀雄

例　言

1　本書は長野市水道局による夏目ヶ原浄水場拡張工事に伴う工事用道路施設予定地内における緊急発掘調査報告書である。調査対象地は長野市大字平柴字夏目ヶ原 162－13番地外の地籍に存在する。

2　調査は長野市公営企業管理者と長野市長との契約に基づき、長野市教育委員会・埋蔵文化財センターが担当した。

3　遺構図はセクション実測図は1：60、調査区測量図は1：100の縮尺とした。

4　調査の諸記録及び出土遺物は長野市立博物館において保管されている。

目　次

序

例言

Ⅰ　調査に至る経過と方法……1

1　調査に至る経過……1

2　調査の体制……1

3　調査の方法……1

4　調査日誌……2

Ⅱ　遺跡周辺の環境……2

1　地理的環境……2

2　歴史的環境……4

Ⅲ　調査……6

1　遺構……6

2　遺物……9

3　まとめ……10

挿図目次

図1　遺跡周辺の地形……3

図2　調査区測量図……(折り込み)

図3　小柴見城址略測図……8

図4　トレンチ断面実測図……9

図5　出土遺物実測図……10

図版目次

I　調査に至る経過と方法

1　調査に至る経過

昭和62年、長野市水道局は長野市大字平柴字夏目ヶ原に所在する夏目ヶ原浄水場拡張工事に伴ない、工事用道路の施設を計画した。事業予定地は小柴見城址の空堀の位置にあたり、長野市埋蔵文化財センターは事業着手前に、空堀の規模・形態等につき、確認調査による何らかの記録保存を行う必要性を認め、昭和62年10月26日より調査に着手する運びとなった。

2　調査の体制

調査主体者	長野市教育委員会教育長		奥村秀雄
総括責任者	長野市埋蔵文化財センター所長		小木曽敏
庶務係	〃	所長補佐	小山　正
	〃	職員	倉田佳世子
調査係	〃	調査係長	矢口忠良
	〃	主事	青木和明
	〃	主事	千野　浩
	〃	職員	中殿章子
	〃	職員	横山かよ子
特別調査員	小林計一郎　（長野郷土史研究会　会長）		
	小出　章　（長野県文化財保護協会　常務理事）		
執筆者	和田　博　（長野市立博物館専門主事　第II章執筆）		
調査作業員	大田　寛　蔵之内栄二　小穴志津　小嶋清隆　田尻　功　丸山純一		
	丸山満広　百瀬英実　森泉武夫　（以上　長野高専生徒）　池田喜		
	久雄　井上仁八　柿澤瀬市　木村喜佐雄　小宮山孝一　鈴木恒治		
	鈴木武与　竹ノ内正義　林　喜幸　藤原喜一　松下利久		

3　調査の方法

道路施設工事によって本郭北側の２本の堀のうち、北側の堀と中央の土塁部分の約半分が破壊されるため、調査は北側の堀切の様相と土塁の構築状況を明らかにすることを目的とした。したがってまず堀に直交する南北方向にトレンチを設定して構築状況ならびに堆積状況を確認することを試み、その後トレンチの東西方向へ調査区を拡張して、空堀構築時の様相を把握することを試みた。調査区はトレンチを境として東方を第I区、西方を第II区とした。日程、調査予算等の関係から掘削にあたっては可能なかぎりバックホーを援用した。

4　調査日誌

10月24日　発掘機材搬入。

10月26日　発掘調査開始。堀中央部に南北方向のトレンチを入れる。堀底部までトレンチ断面にて確認する。

10月27日　第Ⅰ区調査開始。

10日28日　第Ⅰ区調査終了。第Ⅱ区調査開始。

10月29日　第Ⅱ区調査継続。

10月30日　第Ⅱ区調査終了。トレンチセクション実測。発掘機材撤収。

11月4日　発掘区測量作業（平板測量）。本日にて現場におけるすべての作業を終了する。

Ⅱ　遺跡周辺の環境

1　地理的環境

標高 785mの旭山は、新第三紀中新世の海底火山活動で生じた凝灰岩層からなる富士ノ塔山塊の東端に所在し、造山活動による隆起と共に差分浸食を受けて残された比較的硬い流紋岩が主体となって構成されているため、急峻な山容を見せて市街西郊にそびえ立っている。殊に北から東側にかけては門沢断層が走ったり山脚を裾花川に洗われたりして断崖や沢崩れを伴い、一気に400mも駆け下りる急斜面となり、以前は山陰に少年たちの絶好な川遊びの場となっていた竜宮淵の奇勝も見られた。

裾花川は門沢断層沿いにさらに東南流して旭山東南山麓台地の北端を浸食し、カジカ鳴く白岩の景勝を造っている。白岩は流紋岩質凝灰岩（裾花凝灰岩）を基盤としているが、詳細に観察すると旭山寄りから流紋岩、溶結凝灰岩、凝灰岩と漸移し、それぞれの境目に旭山断層と平柴断層の破砕帯が存在する。これらの断層は当市東北部の若槻地域を走る田子断層に対応するもので、平柴台地に階段状地形を形成し、さらに西南に延びて富士ノ塔山塊の東南山腹に三登山南斜面間様数多くの三角末端面（Terminal Facet）を構成している。

平柴台地はこのような基盤の上に砂礫などを主体とする第四紀更新世後期の河岸段丘堆積層（南郷層）が載る。このような豊野層の上に南郷層が堆積する様相は、往生寺台地－城山丘陵－若槻台－長峰－豊野町山麓丘陵－観音山などに広く見られ、豊野湖盆堆積やそれ以後の旧裾花川堆積が地殻変動によって隆起すると共に門沢断層などによって断ち切られたという平柴台地の生い立ちを物語っている。また旭山寄りの台地上部では大黒山や阿弥陀堂高地下の傾斜変換線（平柴断層）附近まで崖錐が南郷層をさらに覆い、勝手沢以南では旭山断層線との接点附近を扇頂とする平均十程度の斜度で日当りのよい崖錐状扇状地形を呈する。

図1　遺跡周辺の地形（○印が調査地）

戦時中までは畦畔に杏が咲き桑園や野菜畑あるいは食糧増産の麦秋風景が展開する典型的な近郊農村であり、扇端附近から台地麓を縫って大町街道がうねり街村が両側に続いていたが、街道沿いに国道19号線が整備され、それを基線として扇状地や低平地に団地が造成され、現在では一大住宅地域となり、平柴地域では台地にリンゴ畑も広がっているが、勝手沢以北にも住宅が並んできている。

台地東南端には本城跡遺構や夏目原浄水場のある小柴見丘陵が台端を構成している。この丘陵は犀川以北の盆地西縁部に城山－若槻台－長峰－豊野山麓丘陵－観音山と前記のように続く豊野層丘陵に観察される背斜軸の一貫で、西翼の断層谷に勝手沢支流の権現沢が深い浸食を刻みながら南流し、その延長線上の白岩には破砕帯も存在する。東翼は裾花川低平地と70～80ｍの段差を形成し、そこに菅佐推定断層に連続するとみられる小柴見潘断層の存在を指摘する研究もある。この東西両翼の層すべり急斜面が、丘陵南端を切りとる勝手沢の深い浸食谷と相俟って、北を白岩の断崖で限られる小柴見丘陵をより要害堅固な地としている。

2　歴史的環境

「朝日てり夕日輝く其下に黄金千杯漆千ばい」の朝日長者伝説を有する長者屋敷古墳から1691年（元禄４）に直刀７ほか勾玉・金環・馬具などの出土があり、この地域が幾多歴史の春秋に富むことを示唆している。

県史所載の遺跡地名表によると、附近に縄文・弥生時代を主とした土器・石器等出土地が数ヶ所挙げられているが、わけても平柴台住宅団地造成に先だって1971年（昭和46）に調査された平柴平遺跡では、縄文時代後期の敷石遺構６、弥生時代住居址16、弥生～古墳時代の方形周溝墓4、古墳時代後期～平安時代土壙墓８等が検出され出土した遺物に多量の炭化米も含まれていた。

安茂里地域では山麓から時には蕨平古墳群のように 400ｍも比高差のある山頂近くまで数多くの古墳が残存し、前記地名表には平柴と小柴見地域のみで22基が記され、その大部分が後期の横穴式円墳とされている。それらのほとんどは既に盗掘されており、副葬品は双子塚など３基から玉類、金環・銀環・直刀・馬具が各１基からと報じられているにすぎない。これ以外にも副葬品が出ていることは明らかで、前記の長者屋敷古墳副葬品のほか、平柴出土というだけで細部地点不明の獣形鏡１点（浄水場出土との伝承もある）と円筒埴輪２点の現存からも推察できる。

自然環境からしても居住に快適なこの地では、裾花川を遡るサケ・マスを捕り、台地下の低湿地に水田を営んでいた人々が古くから住みついてムラを構成し、その首長やウジノカミは人々の暮らしを見下ろせる台地に葬られ、次第に遠くからもこの付近に家族の奥津城を求めるムラオサが増していったであろう。

そのころ裾花川は現在の県庁付近から居町・七瀬方面に東南流しており、その流路が現状のように人工的に変えられたのは近世初期で、明治大正年代まで白岩側からも平柴台地へ登れる山道

があったという。

従って明治10年代に提出された安茂里村誌に「平柴村は古昔芋井郷に属す」とあるものの果してそうであったか、それとも隔てる川もなく地域的により近接地の芹田（世無田）郷に含まれていたのか、律令時代の情況はにわかには断定できかねる。

平安末期の荘園に天台領月林寺がある。本城跡付近もその領域内か否かは不明ではあるが、そこから西南1.5kmにある正覚院が月林寺の跡とされる。この正覚院は別名窪寺(久保寺)と呼ばれ、藤原中期に造仏された桜材一木造りで像高 181cmの木造伝観音菩薩立像（県宝）を安置し、遠近の厚い信仰を集めている。以前はこのほかにも数軀の古仏像があり、その寺史の古さを物語る。

正覚院西南隣地のケルンバット（Kern but）に窪寺城跡があり、ケルンコル（Kern col）を堀切に利用している。ここは窪寺氏の要害で、居館は南山麓にあったと伝える。1400年（応永7）新信濃守護小笠原長秀の後庁入部にあたって、国人たち大文字一揆の面々がその態度をここで謀議している。その後1465年（寛正6）ごろ窪寺氏は西隣の小田切氏に臣下の礼をとっていることが諏訪御布札之古書からうかがえる。

南北朝時代以降は平柴に守護所が設けられていた。鎌倉時代に船山（更埴市及び戸倉町）に置かれていた守護所は、観応の擾乱にあたって1351年（観応2）足利直義党に攻撃された。平柴に設置されたのは、上杉朝房守護時代前半の1366年(貞治5・正平21)～1370年(応安3・建徳1)ごろと推定され、応安3年守護代二宮氏の軍勢が春山城（若穂）を攻めた後、氷鉋・平柴陣所の警備に当り、秋10月には平柴を拠点として栗田城を囲んでいる。

1387年(至徳4・元中4)守護斯波義種に反抗して横山城に兵を挙げた村上氏ら国人たちが守護代二宮氏泰の守備する平柴守護所に押寄せ、大塔合戦翌年の1401年（応永8）には小笠原長秀にかわって斯波義将が守護に補任され守護代として細川慈忠がこゝに在住している。1404年（応永11）「大将細河兵庫助殿奥郡御発向時桐原若槻下芋河之要害責落云々」（市川文書）とみえるのもここを拠点としたものであり、くだって1446年（文安3）信濃守護小笠原家の家督をめぐって小笠原宗康と同長持が漆田原・大黒塚で戦っている。

大黒塚は現在左近稲荷社のある大黒山（丘山に古墳が築かれている）で、漆田原は台地下と旧裾花川以南に広がる岡田・中御所付近一帯とされている。従って守護所は単に大黒山のみにとゞまらずこの小柴見丘陵をも含んだ地域と考えられ、こゝからは漆田原を足下にし、中世には後庁のあった後町・問御所付近も指呼の間に見下ろせ、守護所として絶好の地を占めている。

甲越合戦の際この地は当初栗田氏の拠るところであった。1555年（弘治1）の条に「善光寺ノ堂主栗田殿ハアサヒノ城ニ御座候アサヒノ要害ヱモ武田晴信人数ヲ3000人サケハリヲイル程ノ弓ヲ800 丁テツハウ（鉄砲）300 カラ御入候」(勝山記)、「旭の地ことごとく破却し和与の儀を以て馬を納め候」景虎書状）とか、弘治3年には「敵陣数ケ所根小屋以下悉放火同日旭要害再興居陣候」（問前）とあるように弘治年間には甲越両軍ともにこゝが作戦の要衝であったことがうか

がわれ、阿弥陀堂高地地続きに御陣山地籍もある。

なお、小柴見城主の小柴見宮内は栗田氏配下であったが、1561年（永禄４）越後方に通じたとして武田晴信（信玄）に誅されたという。(甲陽軍鑑)

近世初頭の1611年（慶長16）朝日山は善光寺領と認められ、1645年（正保２）平柴村が三輪村の一部と交換されて善光寺領となり朝日山守りをして以来、度々入会権その他で小柴見村などとの出入りがあったが、大峯山と共にきびしい山定め（1686・貞享３年設定）が厳守され、本堂再建（元禄・宝永年間）に松材が伐採された以外は明治以降も国有林・風致保安林として保護され、豊かな緑を保持して今日に及んでいる。

近代になって1913年（大正２）狐池一本松地籍（現往生寺浄水場）に引続いて、1925年（大正14）城山でのサイレン吹鳴に変わるまで本城跡のある小柴見丘陵北端・454.7ｍの地点で午砲が撃ちならされ、ドン山の愛称は今も老人たちがしばしば口にするところで、当時の石垣も残存している。1929年(昭和４)夏目ヶ原浄水場がこの丘陵に設置されて以来、施設の整備拡充に伴って城跡遺構の大半が姿を消していった。

（参考文献）『長野地域の地質』『信州北部地方の新第三系の地質学的研究』『上水内郡地質誌』『上水内郡誌』『長野市史』『長野県町村誌』『長野県史』『長野市史考』『長野県の地名』

Ⅲ　調査

１　遺構(図２～４)

トレンチの設定位置は図２に示したＡ－Ａ′間にあり、また断面実測図は図４に示した。断面実測図からもわかるように、堀は現状では約1.90～2.0ｍほど埋まっている。堆積状況は部分的にレンズ状の自然堆積が認められるものの、７～11層等の堆積には人為的な掘削・埋め戻し等の可能性も考えられる。また３層は灰白色粘質土（地山）のブロックを非常に多く含み、後世に土塁を削平した時に形成された堆積層と考えられる。堀は地山であるいわゆる褐花凝灰岩層を掘り切って構築されている。尾根部分を掘り切っているわけであるが、中央土塁部分は後世の削平がかなり及んでいるため旧地形の復元は困難であり、地形的に凹んだ場所を意識的に選定して空堀を構築したか否かは不明である。堀の断面形態は角のとれた逆台形状を呈するが、部分的に鋭い逆台形状を呈する場所も認められる。堀底は平均幅0.90～1.0ｍほどの平坦面を形成するが固く踏みしめられたような痕跡もなく、また特別な施設も認められなかった。堀底と北方の郭との比高差は約5.20ｍを測り、また現状で確認できる土塁最高部との比高差は約2.70ｍほどを測る。堀から北方の郭への傾斜は平均40°前後で、最も傾斜の急なところでは45°前後を測る。また堀から土塁への傾斜は最高で60°前後を測り、測量作業の際には非常な困難をきたしたほどであった。中央部の土塁は、基本的には地山を掘り込んで形成し、さらにその上に盛土して構築されたものと思われるが、盛土の規模は削平のため不明であり、現状では60～70cmの盛土が確認されるにす

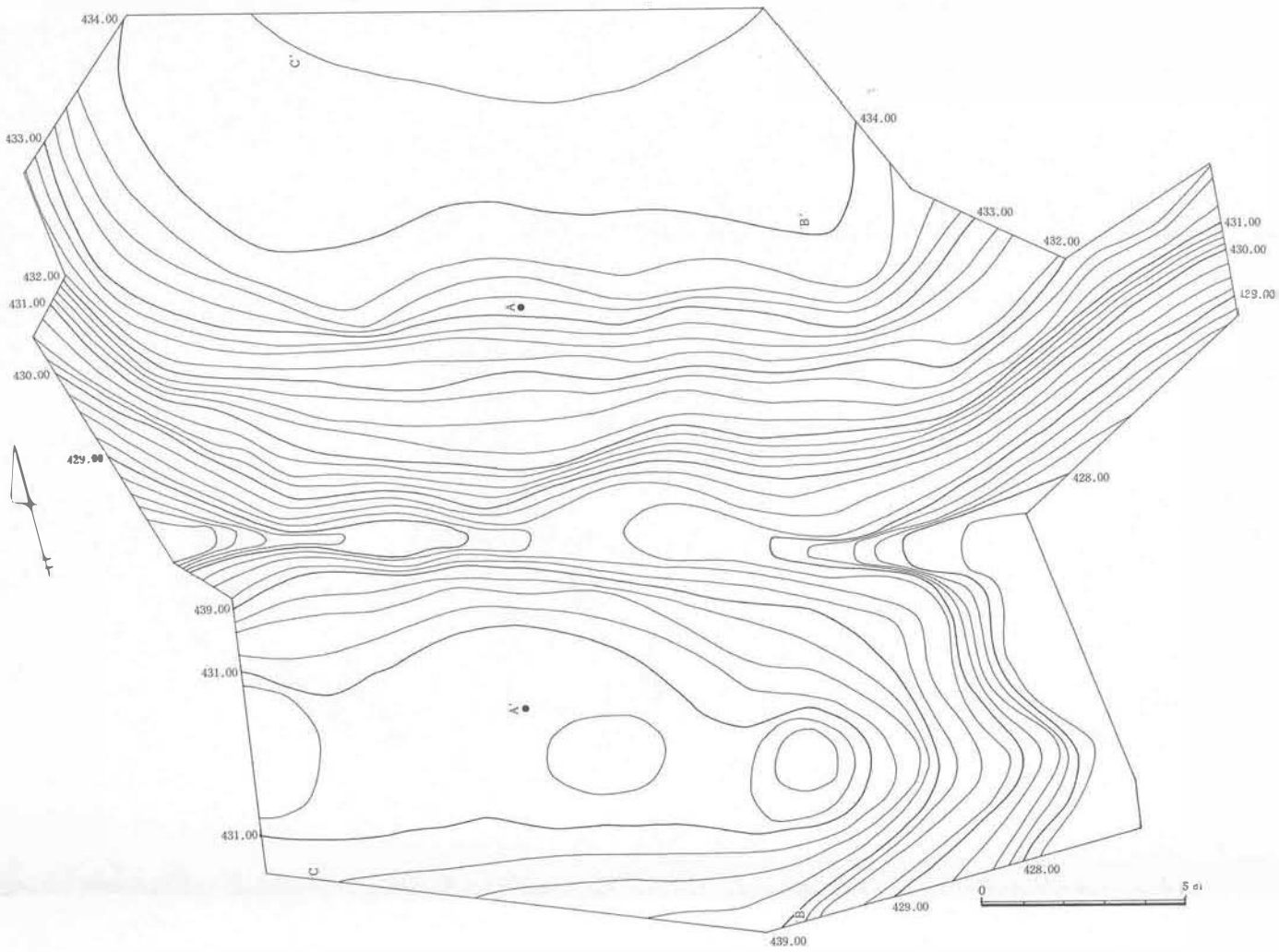
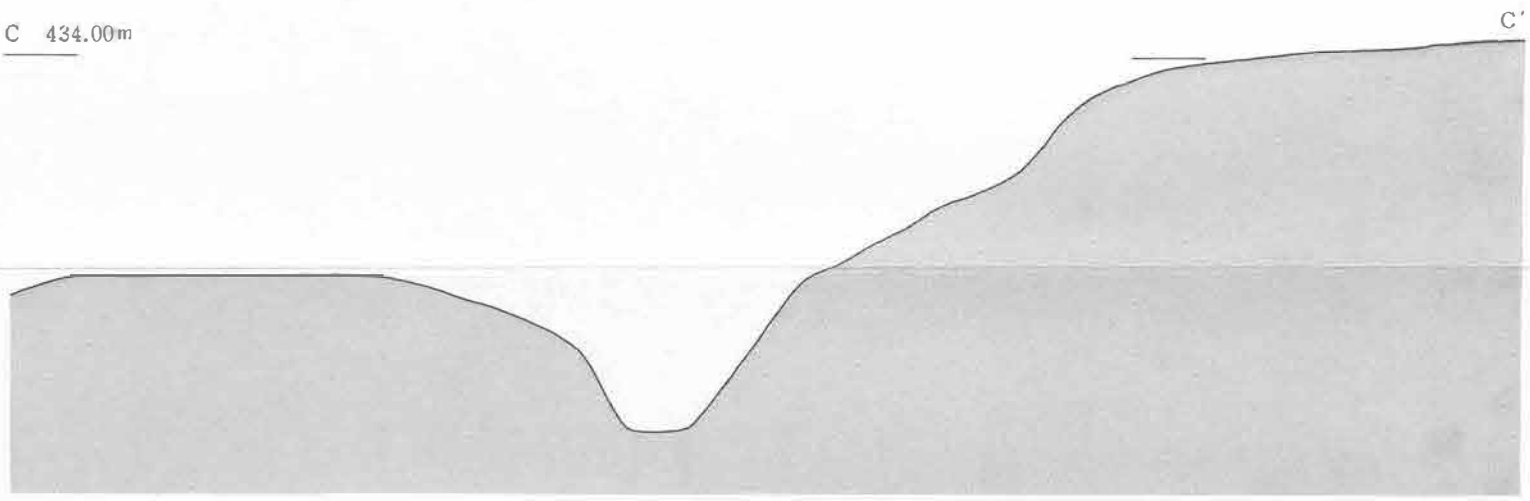
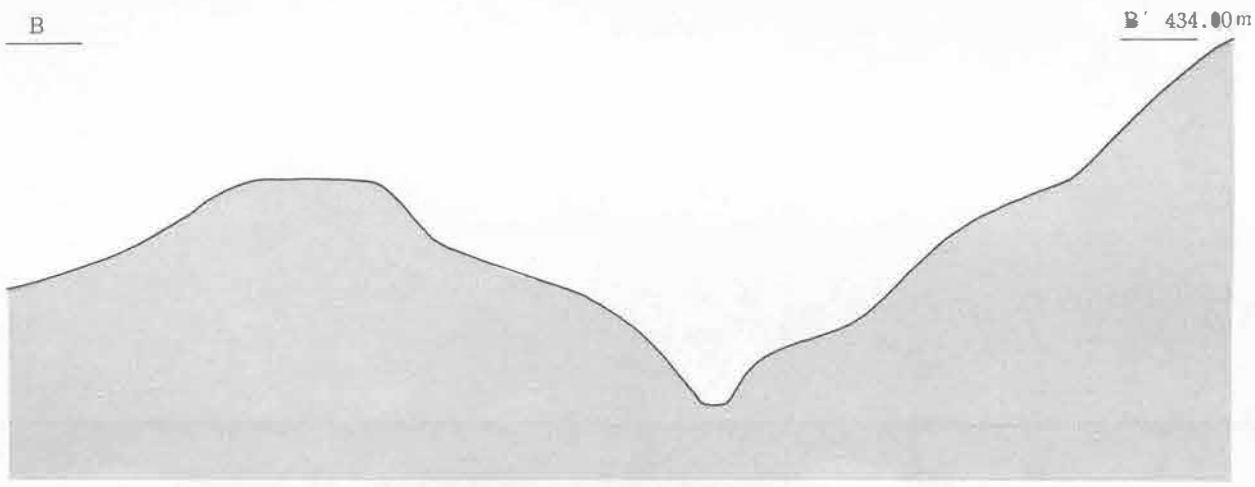

434.00
433.00
432.00
431.00
430.00
429.00
439.00
431.00
431.00
434.00
433.00
432.00
431.00
430.00
429.00
428.00
428.00
429.00
439.00
C'
B'
A
A'
C
B
0
5 m

図2　調査区測量図


C 434.00m
C'


B
B' 434.00m

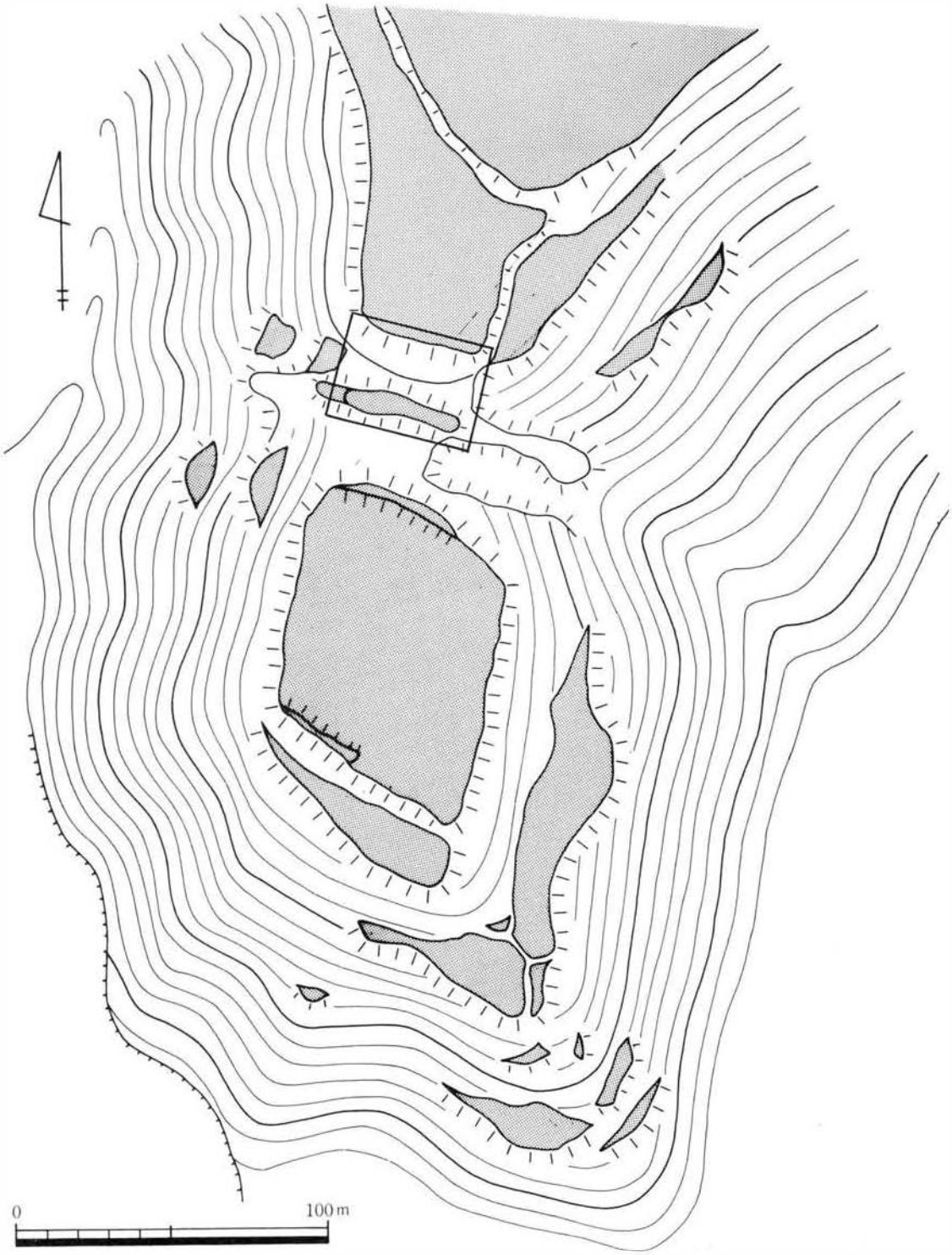


図3　小柴見城址略測図　（□内は調査区）

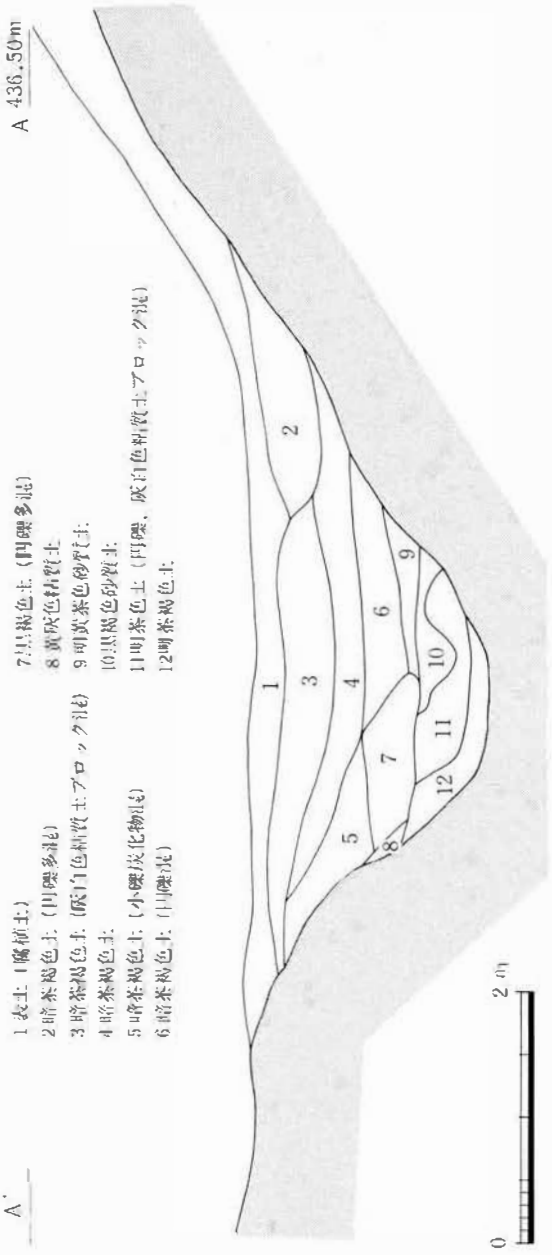


図4　トレンチ断面実測図

ぎない。また調査区土塁中央部は幅5mほどの平坦面を呈しているが、これも後世の削平によるものであることは明らかである。また土橋等の構築物の痕跡は今回の調査では確認されていない。堀ならびに土塁は東西方向へさらに伸びると思われるが、調査区ならびに調査における廃土処理の関係でこれ以上調査区を拡張することは不可能であったため、全体の規模等の詳細は残念ながら不明である。

2　遺物（図5）

石臼（粉挽き臼）が3個出土している。1は安山岩製の上臼で、半径約16.1cm、高さ約11.8cm測る。半分以上を欠損するが芯棒受けと供給口は確認できる。臼の目は六分画七溝式で、ものくばりの形状から左回転と考えられる。供給口の形状は円形を呈し、ふくみは約3.6 cmを測る。また側面にはほぞ状の抉り込みが不明瞭ながら認められ、挽き木は横打ち込み式かと思われる。第II区から堀底に接した状態で検出された。2も安山岩製の上臼で半以上を欠損する。半径約15.2cm、高さ8.6cm、ふくみ2.1cmを測る。芯棒受け、供給口は欠損しているため不明である。臼の目は磨耗が著しく詳細は不明であるが、3本まで溝が確認できる。3は安山岩製の下臼であるが遺存状況は最も良い。径約25.5cm、高さ11.2cm、ふくみ2.8 cmを測る。臼の目は六分画六溝式で、芯棒孔は貫通しておらずやや特異なものである。2・3はいずれもトレンチ掘削中に、堀底より約80cmほど浮いた状態で検出されたものである。

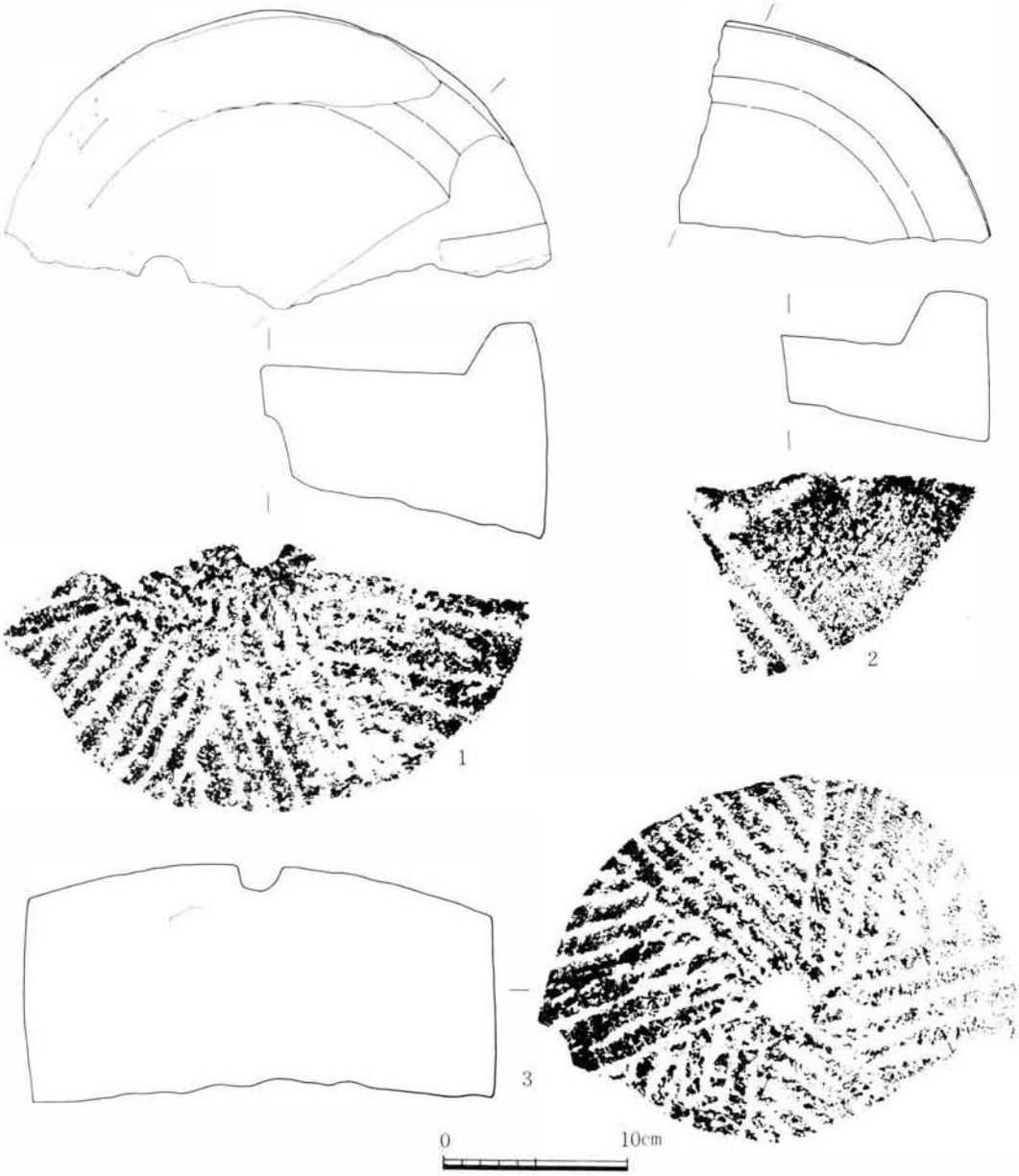


図5　出土遺物実測図

3　まとめ

小柴見城址をめぐる歴史的環境については第II章に詳説されているとおり、南北朝時代以後の平柴守護所との関連、甲越合戦期における両軍の攻防との関連において、北信濃の中世史に対し等閑視できぬ重要な側面がうかがわれる。今回の調査では空堀というそのごく一部を明らかにしたのみであり、その全容を明らかにするには至っていない。今後の調査にかかる期待は大きい。

図版 1

小柴見城址遠景
（大黒山城址より望む）

調査区全景

トレンチ断面

图版2

调查区全景

I区

II区

長野市の埋蔵文化財　第１集『信濃長原古墳群』
〃　第２集『浅川西条』
〃　第３集『中村遺跡群』
〃　第４集『塩崎遺跡群』
〃　第５集『塩崎遺跡群(2)』
〃　第６集『三輪遺跡－付水内坐一元神社遺跡』
〃　第７集『田中沖遺跡』
〃　第８集『篠ノ井遺跡群』
〃　第９集『四ツ屋遺跡（第１～３次）・徳間遺跡・塩崎遺跡群(3)』
〃　第10集『湯舎古墳群・長礼山古墳群・駒沢新町遺跡』
〃　第11集『箱清水遺跡・大峰遺跡・大清水遺跡』
〃　第12集『浅川扇状地遺跡群－牟礼バイパスＡ・Ｅ地点遺跡－』
〃　第13集『浅川扇状地遺跡群遺跡・川田条里的遺構・石川条里的遺構』
〃　第14集『石川条里的遺構(2)・上駒沢遺跡』
〃　第15集『箱清水遺跡(2)』
〃　第16集『石川条里的遺構(3)・（付上駒沢遺跡）』
〃　第17集『浅川扇状地遺跡群－牟礼バイパスＢ・Ｃ・Ｄ地点遺跡－』
〃　第18集『塩崎遺跡群Ⅳ－市道松節－小田井神社地点遺跡－』
〃　第19集『土口将軍塚古墳－重要遺跡確認緊急調査－』
〃　第20集『三輪遺跡(2)』
〃　第21集『芹田小学校遺跡』
〃　第22集『吉田高校グランド遺跡』
〃　第23集『横田遺跡群　富士宮遺跡』
〃　第24集『塩崎遺跡群Ⅴ　殿屋敷遺跡』
〃　第25集『小島・柳原遺跡群　南川向遺跡』
〃　第26集『東番場遺跡』

長野市の埋蔵文化財第27集

小柴見（こしばみ）城跡

昭和63年３月20日　印刷

昭和63年３月31日　発行

編集・発行　長野市教育委員会
　　長野市埋蔵文化財センター
印　　刷　西沢印刷株式会社